

真理への問いとその忘却
—1930年代ハイデガーのプラトン読解の変遷—

早稲田大学 小林昌平

はじめに

本稿の目的は、マルティン・ハイデガー（1889-1976）の1930年代におけるプラトン読解の変遷とその意義を、「真理」と「イデア」を導きの糸として明らかにすることである。1940年執筆の論文「プラトンの真理の教説」は彼の主題的なプラトン論として生前唯一公になったものだが、そこで示された読解は多くの批判に晒された。しかし、1931/32年に行われた講義「真理の本質について」を紐解けば、決してハイデガーは上記論文のような「暴力的」な解釈を行っていないことがわかる。ではなぜそのプラトン読解が「暴力的」なものへと変化したのか。結論から言えば、講義の読解の成果が40年の論文に結実する途上で、新たに出現したハイデガー自身の根本思想により、異なった枠組みへと移し入れられたからである。

その転換点を1936年から38年にかけて執筆された『哲学への寄与（エアアイグニスより）』に見定めたい。この著作で出現した30年代ハイデガーの根本思想「存在史的思索」の中で、1931/32年講義におけるプラトン読解が「真理の歴史」として、1940年論文でのそれが「プラトニズムの歴史」として、重なり合いながら併存しているのである。この二つのプラトン読解が『哲学への寄与』の議論の枠内でいかに関連しているかをも視野に収め、そこに示される30年代ハイデガーの根本思想から、プラトン読解の変遷を考えよう。

当該の問題に関する先行研究では、前後期を貫くハイデガーのプラトン読解を扱った Gonzalez（2009）や、『哲学への寄与』の議論を視野に入れつつプラトン読解を検討した Sallis（2006）、Baracchi（2006）が存在する。しかし『哲学への寄与』でのプラトンをめぐるふたつの議論を主題的に論じているものはない。

そこで本稿では、「プラトンの真理の教説」（以下「40年論文」と呼ぶ）を読み解き、ハイデガーのプラトン読解の独自の点と問題点をあらわにする（1）。次に、上記の1931/32年冬学期講義におけるプラトン読解が、40年論文に示されるプラトン像に収まらないことを示す（2）。最後に、36年から38年にかけて執筆された『哲学への寄与（エアアイグニスより）』（以下『寄与』と呼ぶ）を検討し、論文と講義両方のプラトン理解の両立および関連性から、

31/32 年講義から 40 年論文までのプラトン読解の変遷が何を意味するのかを示す (3)。

1. 論文「プラトンの真理の教説」における真理に対するアイデアの優位

この 1940 年執筆の論文は、42 年に雑誌『精神的遺産』⁽¹⁾に寄稿された (vgl. GA9, 483)。内容は、前半 (203-230) がプラトン『国家』の洞窟の比喩の対訳および解釈、後半 (230-238) がテキストで述べられていないプラトンの「教説 (Lehre)」、すなわち真理概念の歴史における変遷の議論で構成されている。

ハイデガーによれば、「洞窟の比喩」により語り出されているのは、第一にアイデア論であり、第二にそれを軸にした人間の存在者に対する関わりである。洞窟に監禁されていた囚人が解放され、洞窟から太陽の下に出て再び中に帰ってゆく物語は、存在者にしか目をむけていなかった人間が、それとのかかわりを可能にする存在了解を自覚するまでの経過を描いている。

まずアイデア論をハイデガーは次のように解釈してゆく。光に喩えられる「アイデア」「エイドス」は、存在者の「見た目 (外貌 *Aussehen*)」 (214, 221) を意味する。これは存在者の視覚的付帯性ではなく、存在者が現れをもって人間の前に存在しているという本質的な事態を意味する。それゆえこの「見た目」は存在者の「なんであるか (本質 *Was-sein*)」を表す。そのことは、人間が存在者と関わる際に、それがいかに存在しているかを既に理解している、ということを示している。こうしてアイデアによって存在者が存在者として明らかになっていることを、ハイデガーは「非秘蔵性 (*Unverborgenheit*)」 (218) と表現する。周知のように、ハイデガーはギリシャ語の「アレーテイア (*ἀλήθεια*)」を、欠如の接頭辞「ἀ」と「隠れ (*λήθη*)」に分節し、存在者の「非秘蔵性 (隠れなさ)」と理解して、これを「知性と事物の合致」としての命題の真理と区別する⁽²⁾。

ところで、「洞窟の比喩」はただのアイデア論の解説ではない。この物語は、仮象 (影) と真実在 (事物そのもの) という存在者の現れ方の区別だけでなく、そもそも、囚人として描かれる人間が、存在者との関係の中でいかに存在し、その関係性の点においていかに変容するかを語りだしている。この存在者に対する「態度 (*Haltung*)」こそ人間の本質を決定するものに他ならない。存在者との関係を取り結ぶ中心として人間を主人公にする点で、プラトンは「「ヒューマニズム」の始まり」 (236)⁽³⁾ であることになる。

以上が「洞窟の比喩」の解釈である。しかし、論文で焦点が当たるのはこれだけではない。プラトンが「言わなかったこと」、すなわち「真理の本質の

規定についての転回」という「教説」(203)が論じられてゆく。この真理概念の転換の歴史が「形而上学」の歴史であり(237)、その端緒がプラトンにある、というのがこの「転回」の見通しである。

ハイデガーの解釈に問題点を認めざるを得ないのは、実はここからである。以下ではその議論を辿りながら、本稿が問題とするところを二点にわたって指摘してゆこう。

第一に「真理の本質の規定についての転回」そのものについてである。囚人が拘束を解かれるが、日光に眩み洞窟へいったん戻る段階でプラトンは、「しかしいまや、お前は以前よりも実物に近づいて、もっと実在性のあるもののほうへ向かっているのだから、前よりも正しく(ὀρθότερον)、ものを見ているのだ」(515d 3f.)と述べる。この点を手がかりに、存在と「正当さ(ὀρθότης)」が相互に関連しているとハイデガーは考える。この正当さとは「まなざすことの正しさ」であり、視線の「方向付け(Ausrichtung)」(230)である。影なら影に、事物なら事物に対して視線を向き変え、調節して関係を取り結ぶこの働きに「認識と事柄そのものの合致」(230f.)があり、これが後世で命題の「正当性」へとつながってゆく、と見る。

この真理の変化の機縁は、プラトンの「教説」に求められる。すなわち、「イデアのアレーテΙΑに対する優位」(230)である。元来存在者の「非蔽蔵性」を意味するアレーテΙΑは、イデア論に基づきイデアと視線の「合致」と捉えられるようになる。ハイデガーはこれをイデアの「輓」(230)によるアレーテΙΑの支配と捉え、そこに真理概念の転回を見る。

こうしたハイデガーの議論は直ちには受け入れがたい。「イデア」と「真理」が区別され、一方の他方に対する優位が指摘されるからである。あたかも二つは異なる事柄であるかのようである。しかしプラトンのテキストに即せば、イデアは「真実在」と呼ばれることからわかる通り、そもそも存在者の存在と、それが認識されることそのものを意味する。それゆえイデアは決して真理と存在に対して外的に「輓」として付け加わるものではない⁽⁴⁾。

第二に、プラトンからニーチェへと至る哲学史から解釈されている点である。論文でニーチェの名があげられるのは三か所で、彼が形而上学の歴史の「完成」である、という洞察の上で(237)、「善」の概念(227)と「真理」の概念(233)の変遷の中に位置付けられている。そこでハイデガーの論じる両概念の歴史の変遷を見てみよう。

上述のように「合致」もしくは「正当性」として把握された真理概念は、アリストテレスにおいて「命題」の真理となり、トマス・アクィナスにおいてこの合致を「神」が保障するものとなる。デカルトに至ると人間の主観が

神に取って代わり、真理は人間に属するものとなる (vgl. 232f.)。最終的に〈真理は人間という生物が生きるために必要な「一種の誤謬」(233)である〉とニーチェが宣言し、真理概念の転変は終了する。そこで真理は「生」のためのいわば有用物となり、客観的な妥当性を必要としない純粋に主観的なものとなる、というのである。

「善」の変化もこれと呼応する。『国家』第六巻の「太陽の比喻」(508e, 1ff.)に基づけば、太陽としての「善」のイデアは光たる諸イデアを見えるようにするもの、すなわち存在了解を可能にするものである。その際に「善」は、「或るものが、それがそれで在る通りに現れ、またそうして持続性において現前するために有用に（役立つように *tauglich*）する」(228) ことである。すなわち存在は善なるもの、人間に供するものである。時代が下ってニーチェにおいては、「善」は人間が用いる主観的な「価値」となる。その歴史的な可能性の条件を示すためにこうした表現が当てられていると思われる。

こうしたハイデガーの理解にも疑問点があげられる。ニーチェの視点を投影し、プラトンの「善」を「有用なもの」と人間本位に性格づけることは、テキスト解釈として飛躍があるのではないか。イデアは存在者の存在である。単に存在者が現れ出ること、人間の利害関心を読み込むことは一見問題含みに見える。また、この説明以降、「存在の向こう」であるはずの「善のイデア」と他の諸イデアを同列に扱い、あらゆるイデアを「有用」であるというのも、やや『国家』での議論を単純化しているきらいがある⁽⁵⁾。

以上の二つの問題点は、ハイデガーのプラトンの読解の不十分さに由来するのだろうか。それとも、他の要因に起因するのだろうか。それは後者によってなのである⁽⁶⁾。それがいかなるものかを明らかにするため、次節では、この論文の土台となる 1931/32 年の講義「真理の本質について」を検討しよう。

2. 講義「真理の本質について」におけるもう一つのプラトン解釈

『真理の本質について——プラトンの「洞窟の比喻」と『テアイテトス』』(GA34)は、1988年に公刊された、1931/32年冬学期講義の講義録である。『道標』では、40年論文がこの講義に基づくことが示唆されている⁽⁷⁾。同名の講義は33/34年冬学期にも——導入部で新たにヘラクレイトスの箴言の解釈が展開され、プラトン読解も細部に変更がみられるが——行われている(GA36/37)。講義は前半の『国家』「洞窟の比喻」解釈、後半の『テアイテトス』解釈によって構成されている。本稿では、31/32年の講義の前半、「洞窟の比喻」解釈を中心に分析する。

講義での「洞窟の比喻」解釈は、40年論文の前半にあたり、後半の「プラトンの「教説」の現代までに至る変遷は提示されていない。プラトンの「洞窟の比喻」が四段階に区分され、かつ各段階の移行が問題になっている点は、論文と同様である。本節では、ここでのアイデア論解釈を見たのち、前節であげられた問題点について、40年論文と比較検討しよう。

講義の目的は、プラトン『国家』の読解を通して、今日「正当性」と考えられる「真理」の概念を今一度問題に付し、古代ギリシャの根本経験である「非秘蔵性」を明らかにした上で、プラトンを超え「真理の本質」を問うことである（vgl. GA34, 1-19）。同時に、プラトンの中に真理概念の「絡み合い」（17）を見出し、非秘蔵性から正当性への真理概念の変遷を明らかにしてゆく。

まずはアイデア論の解釈から確認しよう。アイデアは存在の「見た目」、「何であるか」であり、アイデアの認識は存在者の存在了解と解釈される。ここまで40年論文と同様であるが、講義ではさらにアイデアが「非秘蔵性を共に-出来（mit-entspringen）させる」（70）のものであると述べられる。この表現は、アイデアと真理が互いに優劣を持たず、同時に生起することを意味している。アイデアは存在了解を可能にする光として「隠れなき」透明なものだが、非秘蔵性それ自体について言えば、それは存在者のあり方である。それゆえ、前節で指摘した第一の点、すなわちアイデアの真理に対する優位の議論はこの読解において登場しない。両者、すなわち存在者が見えるようにすることと、存在者が見えるようになることはいわば同時に生起する一つの事柄である。その一事の一側面である以上、アイデアは真理に対して外的な「軛」と性格づけられることはない。

他方この講義で「軛」は40年論文と異なりアイデア一般ではなく、他でもない「善」のアイデアに相当する。これに関し前節の第二の点、すなわち「善」に関する議論についても40年論文とは異なることが分かる。というのも、ここでハイデガーは善のアイデアが「ウーシア（存在）の向こう（ἐπέκεινα τῆς οὐσίας）」であるということを決して見落とさないからである。つまり、善のアイデアがそれ自身アイデア（存在）でありながらも存在を超越しているという両義性⁽⁸⁾を、ハイデガーははっきりと意識している。そこにおいて善のアイデアは存在と真理の統一根拠であり、両者に可能性を、すなわち「見るもの」と「見られるもの」の双方にその能力を与える「軛」として性格づけられる。つまり善のアイデアは存在論的・認識論的な点で「力能付与するもの（das Ermächtigende）」（99）である。この統一の次元こそが哲学する人間にとり謎めいた次元であり、哲学が問うべき次元である（vgl. 110）とされる。それ

ゆえこの次元は、「有用な」ものといった人間本位の表現で性格づけられてはいない。

以上の議論をまとめよう。40年論文の第一の問題、すなわちアイデアの真理に対する優位は、講義において見られず、むしろ両者は一つの事象の異なる側面として切り出されている。第二の問題、「善」の性格付けと「善のアイデア」の単純化の問題も、講義は回避しているといえる。善のアイデアと他のアイデアは巧みに区別され、善のアイデアこそが「軛」と性格づけられ、「有用なもの」ではなく、「力能付与するもの」として、存在と真理の統一的可能根拠として考えられる。

つまり、講義での議論は、40年論文よりテキストに即し立ち入ったプラトン読解を提示している。ここから翻って問題になるのは次の二点である。第一に、31/32年講義では「アイデアの真理に対する優位」が言われぬ以上、真理が正当性になるようないかなる力動が働いているのかが指摘されていない。第二に、31/32年講義でのプラトンの読解が、ハイデガー自身によってなぜ40年論文では単純化されたのか、その理由を考察する必要がある。以上二点の問題点を総合し、ここで一つの仮説を提示することができる。すなわち、ハイデガーのプラトン理解は、31/32年講義と40年論文の間で、真理概念の転変を説明する新たな思想基盤を構築したために、変更を被ったのではないか。次節ではこの仮説を検証するために、1936-38年執筆の『哲学への寄与』でのプラトン理解を分析する。

3. 『哲学への寄与』における「二人のプラトン」

『哲学への寄与』が『存在と時間』からのハイデガー思想の重要な転換点の中心をなすことはよく知られている。その重要性をハイデガー自身と複数の著名な研究者が指摘していること⁽⁹⁾から、少なくとも30年代ハイデガーの思想の基盤を成す重要な資料と考えてよい。

『寄与』において構想されるのは、「存在 (Sein)」の概念を、「存在者の存在」ではなく存在者と全く手を切った「存在それ自体」である「存在 (Seyn)」(GA65, 7)として新たに考え出すこと、またそのことによって同時に「真理」「人間」「神」といった哲学の根本概念の定義を新たにすることである。

概括的に言って『寄与』の構想は以下のような諸側面を持つ。第一に、哲学の根本問題に関して、その本質に向けた問いがこれまでなされていなかったことを自覚すること。第二に、この問題意識から、哲学の根本問題の本質とは何か、またその本質がいかんして歴史の中で問われなくなったのかを問うこと。第三に、その本質を読み替え、従来とは全く異なった規定を行うこ

とである。これらの作業全体が「存在史的思索（das seynsgeschichtliche Denken）」であり、またこの思索は同時に思索する者をも巻き込んだ西洋全体の歴史の動向、出来事であるため「エアアイグニス（Ereignis）」と呼ばれる。エアアイグニスとして、古代ギリシャ哲学に端を発して現代まで続く「形而上学」の歴史をハイデガーは「第一の原初」（175）と、彼自身による思索の転換によって開かれる将来的な歴史の次元を「もう一つの原初」（176f.）と性格づける。

以上のことを、本稿で問題となる「真理」に関して言えば以下のようになる。すなわち、今日まで自明視された真理を第一の原初における根本経験まで遡行し、その本質を問う。これは 31/32 年講義と共通する目的である。ただしプラトンにおいて存在者の真理が問題になったが、真理そのものの本質は問題になっていなかった。最終的にはこの本質を、第一の原初の「非秘蔵性」の読み替えによって「存在の真理（Wahrheit des Seyns）」として考え出し、そこへと「飛躍」（76）することが目的である。

これまでのプラトン理解に関する議論が位置するのは、その準備段階となる第二の作業である。すなわち、第一の原初で存在と真理の本質への問いが問われていないことが明らかになる。その際プラトンは、「イデア」と「真理」両方の歴史の変遷に関わる。前者の議論は第二章「投げ渡し（Zuspiel）」での 109 節「イデア」から 114 節「ニーチェの形而上学的な根本的立場について」において、後者の議論は第五章「根拠定立（Gründung）」において 204 節「真理の本質」から 237 節「信と真理」にわたって論じられる。このことからわかるように、40 年論文同様に『寄与』においてもイデアと真理そのものが区別されている。

以下では、両議論の分析を通して、「イデア」の議論が 40 年論文と連動し、「真理」の議論が 31/32 年講義と密接な関係にあることを示す。その上で両議論の『寄与』における関係を論じる。最終的に、前節の仮説を考察し、講義と論文の前提が異なること、さらに言えば両者の間にあるのは「変遷」ではなく、「存在史的思索」の上での位置づけの差異であることを示す。

（1）第五章「根拠定立」——真理の歴史

「根拠定立」の「(c) 真理の本質」では、真理の本質を問うために、その第一の原初における根本経験と、その変遷が論じられている。その根本経験が存在者の「非秘蔵性（Unverborgenheit）」すなわち「アレーテイア（ἀλήθεια）」という真理に他ならない。ここで重要なのは、プラトンがいかにかそれを経験したかよりも、アレーテイアがプラトンにおいていかにか変化を被ったかを問

題にしているということである。

そこにおいて、アレーテイアはプラトンにおいて概して「存在者の非秘蔵性」(332, vgl. 334)として性格づけられている。その上で、ここでプラトンが真理を「軛」として性格づけたことが問題になる。それは以下の引用から明らかになる。

プラトンは、アレーテイアを軛として捉える。ところが軛から真理はそれ以上支配的になることはない。むしろ逆のことが起こりえるのである。合致への歩みがなされてしまっている。軛をアレーテイアとして解釈することは正当 (richtig) である。しかし知っておかねばならないのは、この事によってアレーテイアそのものは特定の観点から解釈され、アレーテイアを本来的に問うことはそれまでに断ち切られてしまっているということである。(335)

プラトン自身は、真理を軛として捉え、それにより「正当性」(合致)という「軛」の解釈を下準備した。ハイデガーによれば、ここにプラトンの功罪がある。プラトンは真理の根本経験を理解していた点で肯定的に評価できる。しかし他方、プラトンの性格づけによって、後世で軛が真理として捉えられるようになる。すなわち、真理は命題の「合致」としてのみとらえられ、「非秘蔵性」はもはや忘却されてしまったのである。

以上の議論が、31/32年講義の議論の成果を踏まえつつ、またそれを一歩進め、裏付ける役割を持つことが理解できる。つまり、講義で明らかになったプラトンにおける真理の両義性は、むしろ第一の原初における真理そのものの歴史的な変遷の中で捉え直されるのである。

さて、ここで真理の歴史が概観されるのは、忘れ去られた「非秘蔵性」を再び拾い上げ、真理の本質への問いの足掛かりとするためである。とはいえ、そもそも真理の本質を問うという試みは、なぜプラトンから現代に至るまで企てられず、忘却されてきたのか。それは、「イデア」としての真理の解釈によってである。

(2) 第二章「投げ渡し」——真理の忘却の歴史

この章では、「プラトニズム」、すなわち存在と真理の「イデア」という解釈がその後の歴史に及ぼす影響が問題になっている。プラトニズムの歴史が、西洋哲学の全歴史にわたって、真理の本質への問いを「抑圧」(208)している、というのである。

それはハイデガーによれば次のような事態である。プラトンにおいて、イデアは存在者の存在である。その「存在の向こう」に善を考えることは、アリストテレスにおいて人間の「幸福 (εὐδαιμονία)」との関係で考えられることとなる。すると人間の幸福に資する善は「有用なもの」と言われることとなる。ここで存在者は人間との関係の中でのみ考えられるようになり、人間に対立するもの、「対-象 (Gegen-stand)」となる (210)。以上のような「対象」に対しデカルトの「コギト」(211)において「主観」が確立し、存在は個別的な主観の所有するものとなる。翻って対象は、主観により「表象」されたものとして、主観が根拠づけることとなる。この主観性の優位によりプラトニズムは「観念論 (イデアリズム Idealismus)」(210)と称される。こうして主観の「表象」として存在者の存在を理解するプラトニズム＝観念論は、ニーチェにおいて顛倒される。すなわち観念論に対抗し「生」を全き現実性とする「生物学主義」(221)が現れ、後者の優位が宣言されることになる。ここにおいて主観性 (生) による存在の所有が完成する。

プラトニズム＝観念論の歴史において、存在者の存在が「イデア」と性格づけられ、人間が他の存在者から「見るもの-見られるもの」関係により区別される。そのうえで対象面にあった存在が歴史の変遷の中で主観のうちへと置き移される。この存在の地位の移行において一貫して存続しているのは、中でもイデアとしての真理の本質が、もはや問われなくなることである (vgl. 207f.)。主観によって存在一般を担保するプラトニズムは、もはや「正当性」として固定化した真理概念を問いに付すための足がかりを失っているのである。

以上のように『寄与』において描かれたプラトニズムの歴史と 40 年論文における真理の歴史に共通するのは、両者とも真理に対するイデアの優位を問題にしている点、またそれにより善が主観の優位を予告する形で「有用なもの」と規定される点である。ただし 40 年論文が真理の主観化の歴史を概観しているのに対し、『寄与』は存在の主観化を中心におく。すなわち、プラトニズムの歴史と 40 年論文における真理概念の歴史は、「イデア」として性格づけられたことに端を発する真理の本質への問いの忘却を、「存在」と「真理」の側面からそれぞれ描いたものなのである。つまり、40 年論文で論じられているプラトンの真理の「教説」は、プラトンの自身の哲学ではなく、「プラトニズム」の思想であることになる⁽¹⁰⁾。

以上の議論から、『寄与』におけるプラトニズムの歴史と、真理の歴史の関係が明らかになった。そこでは、存在者の非秘蔵性としての真理、すなわち

「アレーテイア」の本質を問うことが問題となっている。ところが真理を「イデア」として解釈することにより、この問いを問うための足掛かりとなる「非秘蔵性」という真理概念が、「プラトニズム」の歴史のうちで失われている。この問いの忘却の歴史が形而上学の歴史に他ならない⁽¹¹⁾、とするのである。

この『寄与』の議論を 31/32 年講義と 40 年論文の関係に投影すれば、次のことが明らかになる。すなわち、講義において企図された真理の本質の問いは、現代にいたるまで抑圧されてきた。その事態に直面し、40 年論文で語られている真理概念の変遷という「形而上学の歴史」と距離を取ることで、プラトンにおいて伏在している「非秘蔵性」を明らかにする。そこではじめて、その本質を主題的に問うことが可能となる。この本質こそが『哲学への寄与』の中心となる「存在の真理」に他ならない。こうした企図から見て、講義の言葉を用いれば「真に歴史に立ち返ることは、本来的な将来性の決定的な原初」(GA34, 10)なのである。

おわりに

本稿では、1 で 1940 年執筆の論文「プラトンの真理の教説」、2 で 1931/32 年講義「真理の本質について」を読解した。3 では、両者の議論を異なる文脈のうちに位置付け、かつ両者の蝶番となる 1936-38 年執筆『哲学への寄与』を読解し、講義から論文へのハイデガーのプラトン読解の変遷とその意義を明らかにした。

以上の議論で明らかになったのは、講義から論文に至るプラトン読解の変遷は、正確に言えば「変遷」ではなく、「存在史的思索」というハイデガーにとり根本的な出来事思想が包摂する二側面であるということである。40 年論文はその「形而上学の歴史」という一側面を切り出したものに他ならない。講義と論文の企図はその一貫したコンテクストの中で立体的に関連させて初めて共に意義をもつのである。すなわち、講義で問題になる真理の本質への問いは、論文で問題になる「プラトニズム」の歴史におけるその問いの忘却の歴史を辿ってはじめて、その古層として掘り出されるのである。

本稿では、31/32 年講義の後半で論じられる真理のもう一つの側面、すなわち「非真理」の問題には言及していない。ハイデガーの「真理」概念をめぐる議論の特異性は、真理の本質を「非真理」と一体にして論ずる点にも存する。この統一性とプラトン読解の変遷の関係を考察することは、今後の課題となる。

注

(1) その後この論文は「ヒューマニズム書簡」とともに 1947 年単行本として出版され、その後『道標』の単行本（1967 年）に収録された。本稿で用いているのは、『道標』全集版（GA9）のテキストである。

(2) Szaif はプラトンに読み取れるこうした真理の側面を、存在者とその認識を可能にする「存在論的・認識論的真理」と呼ぶ。Vgl. Szaif (1996), 15-17. とはいえ、「非秘蔵性」を古代ギリシャの「根本経験」と考えることを彼は文献学的に批判する。ホメロスにおいて既に真理は命題の「正当性」としても考えられており、両者の使い分けを明確にはできない。Vgl. 145f., 528. 同様の批判は既に Friedländer が行っており、「哲学の終わりと思案の課題」（1964）でハイデガーに、プラトンにおける真理概念の移行が見出せないと言わしめるに至った。Vgl. Friedländer (1954), 236-242; GA14, 87. 本稿ではあくまで 30 年代に絞って議論を行う。

(3)、「ヒューマニズム」の文言は「ヒューマニズム書簡」と併せ出版された際に付け加えられたものではなく、既に『精神的遺産』のバージョンにみられる。Vgl. PL, 122.

(4) この点については、Cf. Gonzalez (2009), 124f. また藤沢訳でこの箇所（507e6-508a1）の「ζύγρον」は「絆」と訳されている。

(5) この点については Dostal (1985), 81-82、Sallis (2006), 188ff., Gonzalez (2009), 131 が指摘している。

(6) Dostal (1985) は、真理の転変をプラトン自身の議論ではないとハイデガーが考えていることを指摘している（81）。

(7) 『ニーチェ』の序文では、論文が既に「30/31 年に生まれた」（GA6. 1, XII）と述べられている。論文と講義の議論の違いから考えるに、実際は 30-31 年に論文の「着想が生まれ」、また 31/32 年が基になっている、ということだと考えられる。

(8) Herrmann、Szaif が指摘するように、『国家』でのアイデアの序列関係は一義的に決定できるものではない。それゆえこの両義性は必然的と言える Cf. Herrmann (2007), 225, Szaif (1996), 137.

(9) 例えば、vgl. GA9, 316, Anm. 1, Pöggeler (1963), ガダマー (1988), 24, von Herrmann (1994), 29.

(10) これをニーチェに即して存在と真理両面から語り直したものが「ニヒリズム」の歴史に他ならない。Vgl. GA5, 243-246.

(11) 山本 (2009) は、むしろ「根拠定立」での真理概念の変遷と 40 年論文との近親性を指摘しているが (193)、本稿に従えば、この章の問題意識はすでに「投げ渡し」の章において準備されていたと言えるだろう。

参考文献

(1) ハイデガーの著作

(a) 全集からの引用（引用は『ハイデガー全集』（Heidegger, *Martin. Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Klostermann, 1975-）から行った。セミコロンの前は略称であり、全集の略号 GA とともにアラビア数字で巻数を表した。）

GA5: *Holzwege*, 1977.

GA6.1: *Nietzsche I*, 1996.

GA9: *Wegmarken*, 1976.

GA14: *Zur Sache des Denkens*, 2007.

GA34: *Vom Wesen der Wahrheit : zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, 1988

GA36/37: *Sein und Wahrheit*, 2001.

GA65: *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*, 1989.

(b) 論文からの引用（セミコロンの前は略称である。）

PL: „Platons Lehre der Wahrheit“ in: *Geistige Überlieferung: Jahrbuch*, Küpper 1942, S. 96-124.

(2) プラトンの著作

Slings, *Platonis Rempublicam, recognovit brevique adnotatione critica instruit* S.R. Slings. Oxonii: Clarendoniano, 2003.

藤沢令夫訳『国家』上下巻、岩波書店、1979年。

(3) 二次文献

Dostal, Robert J., “Beyond Being: Heidegger’s Plato,” in: *Journal of the History of Philosophy*, Vol. 23, No. 1, 1985, pp. 71-98.

Friedländer, Paul, *Platon*, 3. Afl. vol. 1, Gruyter, 1964.

Gonzalez, Francisco J., *Plato and Heidegger: a question of dialogue*, The Pennsylvania State University Press 2009.

Herrmann, Fritz-Gregor, “The Idea of The Good and the Other Forms in Plato’s Republic,” in: *Pursuing the Good: Ethics and Metaphysics in Plato’s “Republic,”* Edinburgh University Press 2007, pp. 202-230.

Heidegger and the Greeks: Interpretative Essays, Indiana University Press 2006.

Baracchi, Claudia, “Contributions to the Coming-to-Be of Greek

Beginnings: Heidegger's Inceptive Thinking," pp. 23-42.

Sallis, John, "Plato's Other Beginning," pp. 177-190.

Pöggeler, Otto, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Neske 1963.

Szaif, Jan, *Platons Begriff der Wahrheit*, Verlag Karl Alber GmbH, 1996.

von Herrmann, Friedrich-Wilhelm, *Wege ins Ereignis: zu Heideggers
"Beiträgen zur Philosophie,"* Frankfurt am Main: V. Klostermann
1994.

山本英輔『ハイデガー『哲学への寄与』研究』法政大学出版局、2009年。

ガダマー、ハンス・ゲオルグ「マルティン・ハイデッガーのただ一条の道」

『実存思想論集Ⅲ『存在への問い』』、1988年。